

未来のために学ぶ

若松 明子

私には、高校二年生の息子と、中学一年生の娘がいます。子供たちがよく口にするのが、「なんで勉強しなくちゃいけないの？」

「この勉強が、将来なんの役に立つの？」

そう聞かれて返す言葉は、

「いい学校に入るため、良い会社に就職するためだよ。」

子供たちが納得できるように、具体的な話ができればいいのですが、それくらいしか思い浮かびませんでした。私の方がもつと勉強しなければならぬのではないか、そう思っていた時に出合った本が、「ミライの授業」。京都大学で客員准教授をしている瀧本哲史さんが、中学生を対象に行った特別講義をもとに書かれた本です。ですから本の内容は、中学生に向けたメッセージになっているのですが、まずは自分が読んでみよう。それから子供たちにも勧めてみようと思い、読み始めました。結果、大人にも読み応えがあり、私自身が大いに刺激を受けました。

まず、一番印象に残っているのが、「何で勉強しなければならないのか、どうして学校に行かなければならないのか」という子供

たちの疑問に対して、次のように答えたことです。きみたちは、勉強そのものが嫌いなのではない。勉強という「やる意味がわからないもの」をやらされるのが嫌いなのだ。例えば大人なら、何で仕事しなければならぬのか、どうして会社に行かなければならないのか、とは思いません。それは、生活していくために給料をもらう、社会の一員としての責務を果たす、仕事を通じて自分を成長させる、など、目的がはっきりしているからです。また、子供たちにとって学ぶ場は、学校以外にもたくさんあり、習字を習うための習字教室、サッカー選手になりたい人が通うサッカースクール、料理人になりたい人が通う調理師学校。大人でも子供でも、目的、目標がはっきりしていれば、がんばることができると思います。では、なぜ学ばなければいけないのか、という疑問に対して、筆者は次のように言っています。みなさんが学んでいるものの正体、それは「魔法」です。いま、みなさんは「魔法」の力で未来を変えるために学校に通い、勉強しています。また、学校は未来と希望の工場である、とも言っていました。中学生の心、いや、大人の心にもストーンと入ってくるわかりやすい言葉に、感心しました。

そしてこの後、未来を変えるために君たちはどうするべきか、歴史上の人物に触れながら、その人の生き方を通じて、学ぶことの意味がわかりやすく書かれていました。全部で十九人の人物が紹介されたなかで印象に残っているのが、ナイチンゲール、ベアテ・シロタ・ゴードンの二人です。おそらく誰もが知っているナイチンゲール。戦場の兵士たちを優しく看護した女性、というイメージがあると思いますが、彼女は看護に尽くしただけの女性ではありませんでした。ナイチンゲールが戦地で見たもの、それは、兵士たちは戦闘によって亡くなるのではなく、劣悪な環境での感染症によって亡くなっていくこと。それならば、「衛生状態を改善してほしい」と訴えることを考えますが、普通に話をして認められない。そこで考えたのが、戦死者たちの死因を「感染症」と「負傷」、「その他」の三つに分類し、月別に集計してグラフにする、兵士たちの年齢別死亡率をイギリスの平均値と比較するなど、様々なデータを揃え、どんな権力者であろうとも反論できない事実を突きつけたのです。こうして衛生面の重要性が知れ渡り、看護師という仕事が再評価され、感染症の予防にも大きく貢献したこと、この本を読むまで、全く知りませんでした。

次に、ベアテ・シロタ・ゴードンという人物。筆者が、今回紹介する「変革者」の中で、最も無名な人物かもしれない。と書いてあるとおり、私は初めて聞いた名前ですし、多くの方が知らなかったと答えるでしょう。彼女は、五歳から十五歳までのあいだ日本で暮らした女性で、日本女性が置かれた立場にずっと疑問を持っていました。例えば、戦前の女性には参政権がなかった。財産は男性（夫）のものとされ、相続する権利がなかった。子供の親権も夫のものでした。そのような不平等をわかっていたベアテが、日本の新憲法の草案作成に関わることになったのです。当時の日本には、女性と男性が同じ権利を持つ土壌がありませんでした。しかし、日本女性の権利を訴え続けた彼女の情熱が通じたこと、憲法第二十四条を読むとわかります。

様々な分野の様々な人々がどうやって世界を変えてきたのか。すべてに共通するのは、未来を変えるために万全の準備をしておいたことだと思います。そして、世界を変えるためには自分を変えること。この本を読んで、目の前がパッと明るくなりました。大人の私でも変わることができる、そう思います。